すた☆だす

銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すた☆だす

【Ｎコード】
Ｎ８９４７Ｘ

【作者名】
銀

【あらすじ】
星屑のようにちっぽけな俺達の出会いは、奇跡なのかもしれない……
陵桜学園の生徒である白風はやとは、ある日リボンが印象的な少女と出会った。
そして２年のクラス替え。彼等は再会する――。
らき☆すたの二次長編小説です！

キャラ紹介

名前：白風はやと（しらかぜはやと）
性別：男
誕生日：７月２９日
血液型：Ｂ型
容姿：空色の髪、翠眼
身長：１７３ｃｍ
体重：６１ｋｇ
部活：帰宅部
口癖：「もし翼があったら～。」（よく応用が利く。）

イメージＣＶ：森久保祥太郎

２－Ｅ所属。一応主人公。不思議な雰囲気を持つ少年。ノリがいい性格。
普段はよく屋上にいる。父親と奇跡という言葉を嫌っている。現在一人暮らし。

喧嘩はそんなに強くないがやる時はやる。視力がいい為、ダーツなど物を投げた時の命中率が高い。
武器は麻酔薬や睡眠薬を針先に塗ったダーツを使用。

「俺は奇跡なんてもの信じない」

名前：冬神やなぎ（ふゆがみやなぎ）
性別：男

誕生日：１２月１５日
血液型：Ａ型
容姿：長い茶髪、アクアブルーの瞳
身長：１７４ｃｍ
体重：５８ｋｇ
部活：帰宅部
口癖：なし

イメージＣＶ：神谷浩二

２－Ｄ所属。風紀委員。常識人で苦労人。腐れ縁のあきに手を焼いている。主にツッコミ担当。仇名は「やなぎん」、「もやし」。
運動は苦手だが頭はよく、チェス等の頭を使うゲームが得意。但し、チェスをやるとドＳ化する。
何故か扇子を常備していて、それを武器にする事もある。

「はぁ……お前はバカだから分かりやすいんだよ」

名前：天城あき（あまぎあき）
性別：男
誕生日：４月２２日
血液型：Ｏ型
容姿：赤髪、黄昏色の眼
身長：１６８ｃｍ
体重：５７ｋｇ
部活：帰宅部
口癖：なし（アニメ等から引用する）

イメージＣＶ：下野紘

２－Ｅ所属。お調子者でオタク。愛称は「アッキー」。
愛すべき馬鹿。ふざけるのが趣味のようなもので、良く言えばムードメーカー。
洞察眼が優れていて、空気は読めるが普段は敢えて読まない。また、友達を傷つけられる事を決して許さない。
戦闘手段は素手。戦う前に変身ポーズ（毎回違う）をとる。喧嘩はそこそこ強い。

「俺の友達に手を出そうとしておいて、これで終わる訳ねぇよな？」

名前：檜山みちる（ひやまみちる）
性別：男
誕生日：８月３日
血液型：Ｏ型
容姿：クリーム色の髪、藍眼
身長：１６４ｃｍ
体重：５１ｋｇ
部活：吹奏楽部
口癖：なし

イメージＣＶ：白石涼子

２－Ｅ所属。容姿端麗、成績優秀のお坊ちゃん。性格は純粋で優しい。
但し、恋愛に関しては鈍感。特技はフルート。仇名は「みっちー」。

女性の扱い方は父に習った。因みに父親は女たらしのようだ。
女性に話し掛けてもそっけなかったり、視線を合わせてくれない事から、女性に嫌われていると思っている。実は恥ずかしくて目を合わせられないだけで、かなりモテている。
怒りが頂点に達したり気絶すると、もう1人の人格「檜山うつろ」が現れる。
性格は正反対で傍若無人で強欲。みちるはうつろになっている間の記憶はなく、存在すら知らない。

「勿論、みゆきのためだけに演奏会を開いてもいいよ」

プロローグ「羽撃き」

俺は奇跡なんてもの信じない。

ドラマなんかでよくやる「奇跡」。俺はそれが嫌いだ。

奇跡なんてあんなに頻繁にあってたまるか。

だから奇跡なんて安っぽいもの、俺は信じない。

「雲はいいよなぁ…」

大空を見上げて、俺は呟いた。

「もし翼があったら、俺も空を自由に飛びたいなぁ…」

ここは学校の屋上の入り口の上。今は丁度昼休みになった所だな。

ん、授業？サボりだ。

よってここには俺以外誰もいない。いるとすれば、鳥の群れだ。

「よっと」

起き上がり、下に飛び降りる。

周りにいた鳥達も一斉に飛び立った。

その時下に人がいる事を初めて知った。
黄色いリボンをカチューシャみたいに着けている、紫色の髪の女子。
俺に驚いたみたいで、キョトンとしている。

その娘の頭の上にさっきの鳥の羽が乗っかっているのに気付いた。
手を伸ばし、羽を取ってやる。

「付いてたぞ」

それだけ言って、俺は教室に戻っていった。

もし俺に翼があったら、この時既に羽撃いていたのかもしれない。

プロローグ「羽撃き」（後書き）

どうも、銀です。
長編小説、遂に始まりました！
はやと「なんだ？この短いプロローグは？」
おまっ！とりあえず自己紹介！
はやと「えー……。えっと、多分主役の白風はやとです」
これからこんな感じでやっていきますので、よろしくお願いします！

第1話「色々と、始まり」

～つかさ視点～

お昼休みになって、私達は屋上でお弁当を食べる事になった。
でも、こなちゃんは

「ごめん、コロネ買ってくるから先行ってて！」

と言っていなくなっちゃうし、お姉ちゃんは

「私も飲み物買ってくるから、悪いけど先に行ってて」

ってこなちゃんの後を追って行っちゃった。
ゆきちゃんは委員会の仕事で遅くなるって言ってた。

だから、今は私一人で屋上にいる。
早く来たから誰もいない、と思ってた。

「雲はいいよなぁ…」

不意に、上から人の声がした。

「もし翼があったら、俺も空を自由に飛びたいなぁ…」

上には鳥の群れに囲まれて、寝転んでいる人がいた。
あの人の言ってる事、何だかロマンチックだなぁ。
「よっと」
その人が急に起き上がり、私の目の前に飛び降りた。すると周りの鳥達も飛んで行く。
その時一瞬だけど、まるでその人に翼が生えているように見えて、綺麗だった。
驚いて、何も言えなくなった私にその人が気付いた。
そしてこれまた急に私に手を伸ばす。
思わず目を瞑ってしまう私。
「付いてたぞ」
彼の言葉を聞き、目を開けると彼の手には鳥の羽が。
さっき頭に落ちてきたのかな。
綺麗な空色の髪に、翠色の眼をしている彼は、私に羽を渡して行ってしまった。
第一印象は、不思議な雰囲気を持った男の人だった。
「お～い、つかさ～？」
「どうしたの？ボケッとして」
「何かあったんでしょうか？」

あれから3日後。一度も彼の姿を見ていない。

「……はぁ～」

「ねぇねぇ、つかさ最近どうしたの？」
「分からないのよ。空を見ては溜め息を吐くし」
「もしかして、恋でしょうか？」
「「恋！？」」

うわっ！？びっくりした～。
だってお姉ちゃんとこなちゃんが急に大きな声出すんだもん。

「つかさ！」
「な、何？」
「今気になる人がいるの！？」
「う、うん」

私が頷くと、お姉ちゃんはショックを受けたように落ち込んで、こなちゃんとゆきちゃんは目を輝かせていた。

「そっか～、つかさにも春が来たか～」

え？今春じゃないの？

「そんな……つかさが恋……」
「……えっ！？」

確かに私は彼が気になっていた。でも多分、恋とかとは違うと思う。

「違うよ〜。ちょっと気になってただけ」
「本当に？」
「うん」
「な〜んだぁ」

そう言うと、お姉ちゃんは元気になった。

「でも、気になる人というのは……？」
「不思議な雰囲気を持った人で……」
〜はやと視点〜

今は、えーと6時間目だな。
俺はいつもどおり屋上で寝ていた。
今日は1人じゃないがな。

「風樹ー」
「んー？」

隣にいた奴、原田風樹に話し掛ける。

「空が飛びてぇ」
「飛行機乗れよ」
「もし翼があったらなぁ」
「寝てろ」

こんな会話が日常茶飯事だ。

「もうすぐ春休みだな」
「だな」

「お前の予定は？」
「羽音達と出かける」
「突き落とすぞ」
幼馴染いるからって調子に乗んな。
「ふー君！」
下から声がした。風樹をそんな名前で呼ぶ奴といえば……。
「羽音か。授業はどうした？」
風樹は起き上がり、下にいる女子に尋ねた。
風樹の幼馴染の北条羽音である。
「もう終わったよ～！7時間目は出ないと駄目だよ！」
「あぁ、分かったよ！」
「はやと君も！」
「はいはい」
お呼び出しが掛かり、俺と風樹は下に降りた。これもまた日常だ。
もし翼があったら、逃げれたのになぁ。
で、あっという間に春休みになり、始業式だ。
今日から2年生！……って感じはまったくない。
「よっ！はやと！」
後ろからの声に振り向くと、3人の顔見知りがいた。
「屋上で寝てるかと思ったぜ」

この赤い髪に黄昏色の眼のうるさい奴は天城あき。

「流石にそれはないだろ」

真ん中にいる茶髪でアクアブルーの眼をした真面目そうな奴が冬神やなぎ。

「クラス替えの紙、もう見た？」

最後にクリーム色の髪、藍色の眼の人畜無害そうな奴が檜山みちるだ。

因みに俺等４人は１年の時に同じクラスだった。

「いや、まだだ」

「んじゃ、早速見に行こーぜ」

掲示されたクラス表の前には人で混み合っていた。

さて、白風白風……あった。Ｅ組か。

「おっ、はやとと同じクラスか！」

隣であきがうるさく言った。

「あ、僕もＥ組だ」

みちるも同じクラスか。

……ん？誰か足りないような。

「……俺だけDか」
「あははは！やなぎ、お前だけ1人か！」
「うるさい！」
「ギャー！？」

やなぎが思い切り笑っていたあきをシバいていた。
えーと他に知ってる奴は……。

原田風樹

北条羽音

風樹と羽音か。あいつらとも同じクラスになるなんて思わなかったな。

三原才雅

確かあいつは、今噂の何でも屋か。

ま、退屈しないクラスになるだろ。やなぎいないけど。
〜つかさ視点〜

始業式。掲示板にはもうクラス発表の紙が貼ってあった。
えっと、私は……あった。E組だ。

「おっ、つかさ一緒じゃん」

えっ？それじゃこなちゃんもE組？

「みゆきさんも一緒だよ」
ゆきちゃんも？よかった～。
「またかがみだけ違うクラスだね」
はうっ！お姉ちゃん……。
「ただでさえ顔合わせる機会が多いんだし、クラスくらい別になってくれないと私が疲れるわ。」
そうお姉ちゃんは言ってるけど、きっと寂しいと思うな。
だって私達と別れてからまた紙を見に行ってたもん。

途中でゆきちゃんと会って、３人で教室に入ろうとした。
「臭いが堪んなくてさー」
「確かに臭いですよね」
教室のドアを開けると、誰かと向かい合わせになっていた。
多分教室から出ようとしたんだと思う。
ドンッ！
話に夢中になっていたから、その人に気付かないでぶつかってしまった。

「わわっ、ごめんなさい！」
慌てて謝って、その人を見る。
何処かで見たことのある空色の髪に翠色の眼。
「あっ……！」
「あ、あの時の」
屋上にいた、不思議な雰囲気の人。
何だか、色々と始まったような気がした。

第1話「色々と、始まり」（後書き）

どうも、銀です。

第1話、読んで頂きありがとうございます！

はやと「一応メインは総出だったな」

つかさ「緊張したよ～」

今回ははやと、つかさをメインにしましたが、次回はこなた、かがみ、みゆきはもちろん！あき、やなぎ、みちるも活躍（予定）！

はやと「じゃ、また次回」

第2話「自己紹介」

～はやと視点～

教室内はあまり人がいなかった。早く来過ぎたか。

「なぁ、ここで運命の出会い！とかねぇかな？」

「ねぇよ」

「例えば？」

またあきが騒ぎだした。みちるも便乗するなよ。

「学校のマドンナに一目惚れをされ、そのまま付き合うとかな！」

「へぇ～」

「夢は寝て見ろ。俺みたいにな」

俺は席を立ち、教室を出ようとした。

「おい、何処行くんだよ？」

「やなぎン所」

まだ時間はありそうだしな。

俺はドアを開けようと手を伸ばした。

しかし、ドアは勝手に開いた。向かいにいた奴が開けたんだろう。

何故なら、ソイツはそのまま俺にぶつかって来たからだ。

ドンッ！

「わわっ、ごめんなさい！」

相手は俺に気付き、頭を下げて謝った。
黄色いリボンと紫色の髪が揺れる。どこかで見たような……？

ソイツが頭を上げると、顔を見て俺は思い出した。

「あっ…！」
「あ、あの時の」

屋上にいたリボンの娘。

可愛いからか、頭に乗っけた羽が印象的だったからか、とにかく覚えていた。

「なになに？知り合い？」

後ろにいた青い長髪の小さい奴がリボンの娘に聞いた。

「前に話した不思議な人だよ」

不思議な人って……変人扱いか？

「おいはやと！なに運命の再会イベントやってんだよ！」

何時の間にか、あきが俺の隣にいた。
つーかイベントって……。

「で、アンタがここにいるって事は同じクラスか」
「あ、そうですね～」
ぽんやりした様子で答える。とりあえず敬語止めろ。
「なら、自己紹介を」
「あっ！」
うわっ！何だよ？
ピンクの髪の女子が大声で叫んでいた。視線の先には……
「みちるさん！」
「あ、みゆき！」
……みちる？え、知り合いか？
「みっちーも知り合い？」
「うん、幼馴染。小学校の時まで近所に住んでたんだけど……」
「みちるさんが引っ越されてしまって」
なるほどな。
「おっとー！ここでまたフラグが立った！」
「人畜無害な坊っちゃまが幼馴染のお嬢様と再会イベント！」
「やるね、君！」
「お前もな！」
……そこ、なに意気投合している。

キーンコーン

「あ、チャイムだ。詳しい挨拶はまたあとでね！」
「おう！」

そして俺達はそれぞれ席についた。
……おかしい。すぐ来るはずの先生が現れ

ガラッ！

「皆席につけーっ！」

と考えていると、勢い良くドアが開かれ金髪の女性が入って来た。

「あっぶな、ギリギリセーフやっ！」

汗をかき、息を荒くして教卓に立つ。かなり急いで来たんだろうな。

「あー、ウチが担任の黒井やっ！皆学年も上がった事やしいつまでも休み気分でおらんで心機一転頑張るよーにっ！」

この時、皆こう思ったであろう。

『せ、説得力……ねぇ！！』

それから休み時間になり、さっきの面子＋2人で自己紹介を始めた。
1人はやなぎで、もう1人は向こうの知り合いだそうだ。

「まず1番！俺は天城あき！容姿端麗、頭脳明晰の人気者！」
「……っていう夢を見たんだそうだ」

あきの自己紹介に相槌を入れてやる。

「で、もう終わりか？」
「……サーセン！とりあえずよろしく！」

コイツの長所は明るい所だけだな。短所でもあるけど。

「俺は白風はやと。好きなものは空、嫌いなものは奇跡。以上」
「……お前、もっと言う事があるんじゃねーのか？」

あんまねーよ。

「彼女募集中とか？」
「そーそー！」
「違うだろ！」

やなぎにツッコまれた。

「冬神やなぎです。このクラスじゃないけど、よろしくお願いします。柊さんと」
「かがみでいいわよ」
「じゃあ、俺もやなぎでいいよ。……かがみとは同じクラスだよな」
やなぎが紫のツインテールに言った。こいつら同じクラスだったのか。

「おっと、やなぎ君はかがみんルート突入か？」
「もやし君は見た目ツンデレっ娘を攻略出来るか！？」
「「そこ、なに話してるっ！？」」
あ、この2人似てるかも。

「檜山みちるです。新学期から可愛い女性達と仲良く出来て光栄です」
屈託のない笑顔を見せるみちる。
「お前、坊っちゃまとホストどっちだよ」
「？」
「くそっ、俺もそっちにしときゃよかった！」
悔しがってるバカは放っといて、みちる……恐ろしい奴！

「ども、泉こなたです。これでも高校2年生だよ～」
そうは見えないんですけど。
「最後に、貧乳はステータスだ！希少価値だ！」
「いよっ、こなた！輝いてる！」
あき……ある意味すごいなお前。

「柊つかさです。よろしくお願いします」
リボンの娘、つかさはお辞儀した。
「ところで、はやと君。屋上で何してたんで」
「敬語止めろ」
「あ、うん。……何してたの？」
「昼寝。つかさもやってみたらどうだ？」
「わ～、気持ち良さそうだね～」
昼寝同盟に1人追加だな。
「やめれ。アンタそれサボりでしょーがっ！」
「えっ！？」
……チッ、バレたか。

「あたしは柊かがみ。つかさの双子の姉よ」
あぁ、双子ね。あんま似てねーけど。
「クラスは違うけど、よろしく。ところではやと」
……ん？さっきからかがみからの視線がキツい気が。
「何だ？」
「つかさに近付いたら○○スワヨ？」
「！？」
目が紅く光ったような……？怖っ！
「姉バカだから気にする事ないよ」
キッ！
「あー、やっぱ気にした方がいいかも」
こなたが加勢するも、一睨みで退いてしまった。
ここは逆らわない方がいいな……。
「高良みゆきです。どうぞよろしくお願いします」
「よろしくするす」
ドカッ！

煩いあきを殴り伏せるやなぎ。よくやった。
「先程言ったように、みちるさんとは幼馴染です」
「うん。みゆきとも再会出来て嬉しいよ」
「私もです……」
ん？みゆきの頬が若干赤いな。もしかして……。
「気付いたか、はやと」
「あき、こなた。あれは」
「うん、みゆきさんはみちる君に惚れてるね」
な、なんだってー！
「だが当のみちる君はまったく気付いていない！」
ほ、本当だ……。
みちるは、いつも通りの人畜無害な笑顔でいる。
「まさかみゆきさんが攻略する側だったなんてね……」
「しかも相手は鉄壁の籠城みたいな奴だ」
……応援してるぞ、みゆき。
一通り自己紹介が済んだな。
「じゃ、私達はそろそろ戻るわ」
「また後でな」
やなぎとかがみがD組に帰って行く。

キーンコーン
丁度よくチャイムが鳴ったな。
俺達も自分の席に戻って行く。

「はやと君」

……と思ってたら、つかさが話し掛けてきた。

「いつか、飛べるといいね」

……あの時俺が言った事か。

「ああ」

……お人好しだな、つかさは。
そう返したのはつかさが初めてだった。

今日はいろいろあったな。
あき達と同じクラスになって、つかさに再会して、そのまま友達になった。
これからの生活、本当に退屈しなさそうだ。

「白風はやと、だな」

帰り道、曲がり角から誰かが出て来た。
俺の名前を知っている？しかも来ている制服は……ウチの学校のだ。

「誰だアンタ」

ライトグレーの髪が夕日に照らされ、紫色の眼が怪しく光る。
ソイツは俺を指差した。

「敢えて言っておく。力を試させてもらう」

どうやら、まだ今日は平和に終わりそうにない。

第2話「自己紹介」（後書き）

どうも、銀です。
すた☆だす第2話、メイン達の顔合わせです！
はやと「みちるとみゆきが元幼馴染だとは予想外だったな」
最後に現れました奴。当初は出すつもりなかったんですよ。
はやと「あれは思いっきり敵役だけどな」
次回、こうご期待！

第3話「大事な人」

～はやと視点～

「敢えて言っておく。力を試させてもらう」

目の前に現れた男は、カバンを降ろすと俺に向かって来た。

「ちっ、いきなりかよ！」

俺は奴の拳をカバンで防ぎ、カウンターを入れようとする。
だが奴は開いている手で受け止めると、俺を突き飛ばし蹴りを放った。

「ぐっ！」

腕でガードするが態勢を崩し、地面に倒れてしまう。

「格闘スキルはこんなものか」

「くそっ！」

今バカにされた！もう容赦しねぇ！
俺は起き上がり、カバンの中からホルダーを取り出してベルトの右に取り付けた。

これが俺の武器、ダーツだ。

ところで、奴の顔を何処かで見たような……。
……あっ！アイツまさか！

「お前……三原才雅か？」

尋ねると、奴は呆れたような顔をした。

「今更かよ。同じクラスなのにな」

だってあんま話さなかったし。

「俺に何の用だ？」

「言ったはずだ、力を試させてもらうと！」

才雅はカバンから棒状の武器を2本取り出した。

トンファー、つったか？

近付かれたらアウトだ。俺はホルダーからダーツを3本取り、奴に投げた。

カキィン！

しかし、才雅はトンファーを回し軽々と弾いた。

「それがお前の武器か」

「これならどうだ！」

俺はダーツを8本取出し、両手で投げた。
それすらも、才雅は弾いてしまうが。

「命中制度はあるようだな」
「くそっ！」

今度は連続で投げるが、才雅は交わし、弾いて俺に近付く。マズい！

「ふぅ、こんなもんか」

気付くと奴は俺の真正面にいて、喉元にトンファーを当てていた。

「も、目的は何だ！？」
「……3回言わないと分かんないのか」
「俺の力を試すだと？」

俺は喧嘩は大して強くない。
そんな奴の力を試して何になる？
俺の疑問に答えず、才雅は俺から離れトンファーをカバンにしまった。

「敢えて言っておく。お前は狙われている」

酷く驚いた。そんな事言われれば誰だってそうだろう。

「狙われている！？誰に？」

「その程度の力じゃ、不安だな」
「答えろよ！」
「ただ１つ言える事は、いずれ大事な人も巻き込むかもしれない。自分で守れよ。じゃあな」

言いたい事だけ言って、才雅は帰っていった。
何なんだ、アイツは！？
翌日、俺は才雅を見つけだして聞き出した。
「昨日のアレは何だ！？説明しろよ！？」
才雅の傍にいた女子は戸惑っているが、本人は至って冷静だ。
「早くて今日の午後だ。対策を考えておく事だな」
「説明になってねぇよ！」
あくまではぐらかす才雅にいい加減苛立つ。

「やめとけ、はやと」

ふと、後ろから声を掛けられる。そこにいたのは風樹だった。

「風樹！」
「よっ、風樹」
「何企んでんだ、才雅」
何だ？才雅と風樹は知り合いだったのか。

「コイツに少し興味があるだけさ」
「……ったく」
俺に興味がある？コイツの目的がいまいち分からない。
「才雅君、あまり迷惑かけちゃダメだよ」
才雅の隣にいた女子、えーと……上城江里香が、才雅に呼び掛ける。
「敢えて言っておく。別に大丈夫だろ」
その自信は何処から来る。
つーか迷惑掛けまくりだろ。

結局、この時は何1つ教えてもらえなかった。
「何だ？どうかしたのか？」
自分の席に戻ると、あきが話し掛けてきた。
「さぁな。こっちが聞きたい」
「あれは、三原才雅君だね」
みちるも会話に加わった。
「学校内で依頼を引き受け、報酬として食べ物を貰う。その手際の良さや信頼性から他学年でも噂になっている」
「更に美少女の彼女もいる。隣にいる上城江里香がそうだな。チッ、羨ましい！」

「そんな人と何があったの？」
「昨日勝負吹っかけられて意味の分からない警告を受けた。以上」
「何だそりゃ」

俺が知るか。本人にでも聞け。
俺は立ち上がり、教室を出ようとする。

「何処行くんだよ？っていつもの所か」
「えっ？授業は？」
「サボる」

一言残し、俺は去っていった。
こういう時は寝るに限るな。
屋上で寝ていても、才雅の言っていた事が突っ掛かる。

「……は……く……」

大事な人を巻き込む……か。

「はや……君……」

大体狙いは俺のはずだ。大事な人なんて……。
あき達？それはない。

「はやと君！」
「うおっ！？」

何だ！？いきなり大声で呼ばれたらビックリすんじゃねぇか！
隣には、いつの間にか人がいた。

「あ、やっと気付いた～」

って、つかさ？

「何してんだ？」
「はやと君、授業いなかったでしょ」
「よく気付いたな」
「それに、何か悩んでるみたいだったから」
「……顔に出ていたか」

天然の癖に鋭いな。
いや、俺が分かり易かっただけか。

「何でもないさ。今日はつかさに免じて戻るか」
「うん、ありがと～」

この癒しオーラのおかげで、何で悩んでいるかなんてどうでもよくなる。
それは多分つかさの長所なんだろう。

「……やべっ、あと1分で授業だ！」
「えっ！？待ってよ～！」

〜才雅視点〜

「おい、才雅」

昼休み、風樹が話し掛けてきた。

「はやとの事だけどさ」
「お前から聞いていた通り、面白そうな奴だな」
「やっぱりか……」

軽く溜め息を吐く風樹。

「あまり遊びすぎるなよ？」
「分かっているさ。俺も自分の仕事をしないといけないしな」

江里香お手製の弁当を食いながら答える。
敢えて言っておく。やはり江里香の弁当は格別だ。

「という訳で江里香、今日は少し遅くなりそうだ」
「うん、頑張ってね！」

江里香の笑顔と手作り料理だけで俺は頑張れるぜ！
おっと、周りの男子諸君の羨望の眼差しが痛い。

さて、奴はこれからどう動くか……。
〜はやと視点〜

そして、放課後。
何も起こらず、帰ろうとしたら電話が掛かってきた。

「もしも」
「はやと！？助けて！」
「かがみか？どうした？」
「つかさが……つかさが！」

つかさが一体どうしたんだよ！

パニくるかがみからなんとか場所を聞き出して急いで向かう。

そこには、数人の男と、それぞれ捕まったつかさとかがみがいた。

「「はやと（君）！」」
「つかさ！かがみ！」

捕まってはいるが、乱暴された訳じゃなさそうで安心した。

「何だ、アンタ等」
「白風はやとだな。おとなしくボコされてくれねぇか？」
どうやら、つかさを捕まえている男がリーダー格のようだな。

「は？お前等の狙いは俺って訳か」
「そうだ」

なるほどな。才雅の言っていた事も分かった。
いずれ大事な人も巻き込むかもしれない。それはつかさとかがみの事だった。

「ならつかさとかがみは関係ねぇ。放せ」
「そうはいかねぇな。コイツ等は人質だ。お前が変な動きをしたら
どうなっても知らねぇぞ」

ちっ、外道が。

「やれ！」

周りにいた奴等が俺を囲む。
薄気味悪い笑みを浮かべて殴り掛かって来た。
手が出せねぇ以上避け続けるしか

「避けてんじゃねぇぞ！」
「きゃっ！」

リーダー格の男がつかさにナイフを突き立てる。

「つかさっ！……ぐっ！？」

つかさに気を取られている内に殴られる。

ドガッ！バキッ！

ああ……ヤバい、死ぬっぽい……。

「はやと君！はやと君！」
「はやと！しっかりしなさい！」

悪い……2人共、助けられなくてな……。
もし翼があったら、お前等を助けられたのか……。

「うぎゃっ！？」
「な、何だお前は！？」

その時、誰かが割り込んで来た。
俺をリンチしていた連中を次々と殴り倒す。

「敢えて言っておく。しっかりしろ、はやと」

つい最近聞き慣れた声。
三原才雅がそこに立っていた。

「な、何だ貴様！？」
「才雅……何しに来やがった？」

差し伸べられた手を握り、立ち上がる。

「俺はコイツ等を潰しに来ただけだ」
「そーかよ」

背中合わせに立つ俺達。向こうはまだ余裕そうだがな。

「ははは！こっちには人質がいるんだぜ！」
「それはどうかな？」
かがみを捕まえていた奴が前に吹き飛んだ。いや、後ろから殴り飛ばされた。
「詰めが甘いぜ、覚えておけ！」
風樹まで来たのか。
かがみを救い出すと、周りの奴等に殴り掛かった。
「俺達も行くぞ、はやと！」
「……ああ、才雅！」
才雅は向かって来る雑魚を蹴り飛ばした。
トンファーを使う気すらないらしい。
「チッ！これじゃあ計画が……」
リーダー格の男は狼狽えていた。
「もし俺に翼があったなら、お前等を簡単に倒せたかもな」
奴はビクリと身を固める。
気付かぬ内に俺が近付いていたからだ。
口の中の血を吐き捨て、ホルダーからダーツを1本出した。

「う、動くな！コイツがどうなってもいいのか！」
奴はナイフをつかさに向けた。
このまま盾にする気だな。
「そのダーツ、コイツに当たるかもしれないぜ！？」
「そんな気はない」
「バカが！奇跡でも起こす気か！？」
つかさを真正面に構える。左腕で支えていて、右手にはナイフ。まるで強盗みたいだな。
かがみはもちろん、手下を粗方片付けた才雅と風樹も焦り始めた。
だが、俺は違うな。
「悪いが、俺は奇跡なんてもの信じない」
素早く、一直線にダーツを投げた。
プスッ！
「ぐあぁぁぁぁ！」

ダーツはつかさ……を抱えていた奴の腕に刺さった。
フッ、狙いどおりだ。
痛みに悶え、奴はつかさを放した。

「来い、つかさ！」

今にも泣きそうな顔でこっちに走って来るつかさ。

「この野郎！！」

しかし自棄になった奴が、つかさの後ろからナイフを振り上げた。

「ち、力が……！？」

ナイフが振り下ろされる事はなかった。
それどころか、奴はナイフを落とした。
力が入らず動けないようだ。

「無駄だ」

俺は奴に近づき、腕に刺さっているダーツを抜いた。

「俺のダーツの針先には麻酔薬が塗ってある。暫く動けないぜ」
「な……に……」

とうとう、奴は座り込んでしまった。
この時点で俺の勝ちだが、残念ながら俺は優しくない。

「今もしお前に翼があっても……無意味だな」

俺は奴の顔を思いっきりぶん殴った。
あー、スッキリした。

「つかさ、平気だった…」
「はやと君！」

最早泣いているつかさが俺に抱き付いて来た。

「いってぇぇぇぇ！！」

殴られた傷がいてぇ！
もしかしてダーツ投げた事怒ってんのか！？
……それとも、そんなに怖かったのか？

「はやと君、無事でよかった！」

俺かよ！ってか俺の心配してるなら抱き付くな！いてぇ！

……ま、無事でよかったのはお互い様だ。

ビュン！ゴスッ！

「っ！？」

「はやと君！？」

何故か知らないが、上から辞書が俺の頭にクリーンヒットした。

「は～や～と～！よくもつかさにダーツなんか投げたわね～！！」

……他に怒っている人がいたよ。

「当たんなかったんだからいいだろ。大体助けてやったんだ！感謝ぐらいしろよ！」

「あ、ありが」

「あたしは三原と原田に助けられたの！アンタ殴られてただけじゃない！」

「あの、あり」

「誰の所為でそうなったんだよ！俺に助けを呼んだのもお前じゃんか！」

「はや」

「あれはあいつらにアンタを呼べって脅されたの！ってかアンタが狙いだったんじゃない！」

ぐっ、何も言えない。

……ちょっと待てよ。何で俺が狙われたんだ？俺はアイツ等と面識はなかった。

そして才雅は何故知っていた？んで、何処に行った？～才雅視点～

敵のボスに止めを刺したのははやとだったが、俺の仕事「奴等を潰す事」は完了したな。

俺と風樹ははやと達に気付かれない内にその場を去り、裏手に回る。

「ご苦労様。ほら、報酬」

裏手には、俺の依頼主が待っていた。

下には気絶している男が２人。

「毎度あり、やなぎ」

「俺にもあるし。いいのか？」

「ああ。はやとを助けてくれた礼だ」

……回想開始……

～やなぎ視点～

昨日、俺は聞いた。

「チッ、何だあの白風はやととかいう奴は！俺の柊さんに手を出すなんて！」

アイツはウチのクラスの人間で、はやととつかさが仲良く話している所を見たらしい。
「でもどうするんだ？」
「そうだ！俺の兄貴がすげぇ喧嘩が強くてさ、学校にグループを持っているんだ！」

そのグループの名前は町内でも知られていた。

「柊さんを人質にすれば奴は手も出せない。そこに俺が助けに出て来ればきっと好きになる！」
「んでボコボコにされた奴を写真に収めて学校にばらまけば奴の名誉もなくなる！」

最低の自作自演だな。反吐が出そうだ。
挙げ句かがみまで巻き込むなんて。

……回想終了……

～才雅視点～

で、それが今情けなくのびている2人で、やなぎが制裁を下し写真に収めた。

事実が知れれば多分退学だろうな。

「しかし……風樹が言ってた通り、本当に面白い奴だ」「ネタバレは何時するんだ？」

「明日。コイツ等の退学が決定したらな」

俺等もタダじゃ済まなさそうだけどな。

～はやと視点～

「……まぁ一応感謝してもいいわよ」

うわー、素直じゃねーな。

「つかさ、帰るわよ！」

「うん。はやと君、ありがとう」

「気を付けて帰れよ」

2人を見送って、俺も帰った。

細かい事は明日聞き出すか。その前に傷の手当てだな。

大事な人……か。

確かにつかさは大事な友達だな。

第3話「大事な人」（後書き）

どうも、銀です。
まずは第3話読んで頂きありがとうございます。

はやと「前回より長くないか？」

長くしてみました。今回からこれくらいにします。

はやと「あ～、傷がいてぇ」
つかさ「でもはやと君格好良かったよ～」
はやと「そうか？」

さて、次回はとある数字と戦います！

第４話「悪魔の数値」

～はやと視点～

ついにこの日が来た。己のステータスを知る日が。
ある者は知る事を恐れ、必要以上に気を張ってしまう。

そう、身体計測が。

まぁ俺は何の関心もないが。
教室内を見てると、色々気にしている奴等がいるみたいだな。

「今年こそ、羽音の身長を抜いてみせる！」
「頑張ってね、ふー君」
「もー、才雅君は何で太らないの？」
「敢えて言っておく。こっちが聞きたい」

男女で悩みが違うようだ。
が、さっき言った通り俺は何の関心もない。

「ふむ……８４、いや８５か……」
「で、お前はさっきから何やってんだ？」

俺の隣には手でスコープを作って何処かを除いては数字を呟く不審者が１人。

「みゆきさんのバストを予想してるのさ」
誰かー、ここに変態がいるぞー。
「あき君や」
いつの間にかあきの後ろにはこなたがいた。
この際だ、ビシッとやってやれ。
「私としてはこれくらいだと思うんだがね」
こなたは持参した手帳に数字を書いてあきに見せた。
ってお前も同類か！
「あー、俺もその線行ったんだがこっちの方が現実的じゃ……」
「みゆきさんの胸には夢が詰まってるんだよ、現実的に考えちゃあダメダメ」
ダメなのはお前等だ。
「つかさは気にしないのか？」
いつもと変わらない感じのつかさに尋ねてみた。
「ちょっとだけね。あと、お姉ちゃんが結構気にしてて」
かがみの方はそんなに気にするのか。

俺はこの時完全に油断していた。
自分には決して関係ない。
そう思っていた……。
身体計測後、教室内はやはり賑わっていた。

「また負けた……ってかまったく伸びてない……」
「ま、まだ伸びるよふー君！」
「よかった～、増えてなくて」
「俺は相変わらず、だ」
歓喜する者に落胆する者。それぞれだ。

「全然伸びてない……」
「はぅ、横に伸びちゃった……」

こっちにも落ち込んでる者がいた。
一方みゆきは余裕そうである。

「みゆきさーん、３サイズ教え」

ドグシャッ！

「何聞いとるんだお前はっ！」

お～、やなぎいつの間に。

「で？みゆきさん、いくつ？」

地面に顔を埋めたあきを余所に、今度はこなたが聞き出していた。

「実は……」

「……なんですとー！」

ヒソヒソ話で聞こえなかったが、どうやら予想は外れたみたいだ。

「んで、あれはなんだ？」

俺は1人でかなり落ち込んでいる奴を指差した。

「え……かがみだよ？」

みちる、そういう事を聞きたいんじゃねぇんだよ。

「間食が、間食が～っ！」

体重増えたんですね、分かります。

「こうなったらダイエットよ！」

はいはい、頑張ってください。

「わ、私もやる！」

つかさ、お前もか。

「私もお手伝いします」

「僕も」

みゆきにみちるまで。
俺はめんどいからパスな。

ガシッ！

気付いたら、かがみが俺とあきの肩を掴んでいた。

「いってぇな！」
「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！」

「アンタ達も手伝いなさい！」
「「……イエッサー！」」

かくして、ダイエット作戦が強引に始まった。
んで、放課後。ジャージを着た男女８人が何故か神社に集められた。

「いや、何で神社？」
「お参りするのかな？」
「石段を兎飛びか？」
「何処の修業だよ」

男子組が好き勝って言ってると、すぐに答えが帰って来た。

「ここはかがみとつかさン家なんだよ～」
「マジか！？」

家が神社やってたのか……。この辺来た事はあるが気付かなかったな。

「って事は巫女服！」
「何でそーなる」
「でも、たまに手伝うよ～」
「つかさも余計な事言わないっ！」

1人ツッコミ乙。

「それで、何をするんですか？」
「この辺を走るつもりよ」

至って普通だな。

「けど、この人数で走るのか？」

やなぎの言う通り、この大人数で走るのは気が引ける。

「それなら平気よ。くじがあるから」
「用意周到だな」

その熱意にはある意味感心するよ。

「皆選んだ？せーので引くわよ！」

「せーのっ！！」

ペアはこのようになった。

かがみ&やなぎペア
みゆき&みちるペア
こなた&つかさペア
んで、俺とあきのペアだ。

「チッ、野郎とか」

うるせぇよ。

「みゆき、よろしくね」
「はいっ！」

あのペアは安定してるな。相変わらずみちるは鈍感だけど。

「頑張ろうね、こなちゃん」
「私より気になるペアが……」

やはりか。少しは真面目にやれ。

「んじゃ、先に行くけど１０分たったら次のペアが走って」
「分かった」

最初にかがみとやなぎがスタートした。

「……はやと」
「何だ？」

珍しくあきが真面目な顔をしていた。何か不味い事でもあったか？

「やなぎってさ……「もやし」じゃなかったか？」

「あっ！」

しまった、アイツ運動音痴だった！

大丈夫だろうか。

〜やなぎ視点〜

自慢ではないが、俺は体力はない。運動も苦手だ。

将棋やチェスをやっていた方が楽しいしな。

けど、俺は今何で走っているんだ？しかも女子と。

「やなぎ、大丈夫？」

かがみが俺を心配してペースを落としてくれた。

「いや……大丈夫……だ……」

息も絶え絶えだが、強がった。

「息、あがってるわよ？」

まったく意味をなさなかった。

すみません、強がりです。

「まったく、辛いんなら言いなさいよね」

「ごめん……」

「……こっちが無理矢理付き合わせてる訳だし」

そう、あくまで目的はかがみのダイエットだ。

俺は今、それを邪魔してるんじゃないか……？

「かがみ。先に行け」
「えっ？」
「俺なんか気にしないで、先に……」
「……」
無言。そうだ、そのまま俺を置いて
「嫌よ」
「！？」
何で？別に俺に合わせなくても……
「ここで置いて行ったら、無理に付き合わせた意味がないじゃない」
「かがみ……」
俺は、無言でペースを上げた。
「ちょっ、やなぎ！？」
「なら、俺が……」
かがみに合わせればいい。
無理矢理にでも付き合わせろ。
「やなぎ……」
最高に不様な男の、最後の強がりって奴だ。
～みちる視点～
やなぎ達が走り出して１０分後、僕達もスタートした。

軽いジョギングペースで、みゆきと並んで走る。

「そういえば、みゆきと2人で話すのって久しぶりだよね」

いつもは周りにあきやこなた達がいるから。

「そうですね」

「みなみは元気？」

岩崎みなみ、もう1人の幼なじみで2つ下の女の子。

「はい。この学校に進学希望してるみたいです」

「みゆきにベッタリだったからね」

思い出話に花を咲かせる。本当に懐かしいなぁ。

「今度、遊びに行ってもいい？」

「ええ、勿論です」

みなみには内緒にして貰おう。ちょっとしたサプライズとして、ね。

「みちるさんは中学はどうしていたんですか？」

「僕？普通に友達に囲まれて、楽しかったよ」

でも、何故か時々記憶がなくなるんだ。皆には秘密にしてるけど。

「その、恋人とかは……？」

「えっ？いないよ～」

「そ、そうですか」

あ、ちょっと嬉しそうだ。酷いなぁ。

「そう言うみゆきは？」

「私は……好きな人ならいます」

へぇ～、意外だなぁ。おっと、失礼か。

「でもみゆきは可愛いから大丈夫だよ」

「そうでしょうか？」

「うん、頑張ってね」

「……はい」

みゆきが好きな人……少し羨ましいな。一体誰なんだろう？

～はやと視点～

みちる達が行ってからつかさとこなた、最後に俺とあきがスタートする。

「正直めんどい」

「俺もだ」

かがみは一応友達だから付き合ってやってるが、やはりめんどい。

「ってか俺体重減ってたし」

「俺は増えた」

「どれくらい？」

「０．２ｋｇ」

お前、それ増えたとは言わないだろ。

「ところでさ」
「あんだよ」
「つかさとは何処まで行った？」
「何処も行ってねーよ」
「……まぁ、まだ早いか」

何1人で納得してんだよ。
言いたい事は分かるが、そんなんじゃねーし。

「みっちーの方はどうなったかねー」

知るか。こっちが知りたい。

「進展はしてねぇと思う」
「やっぱりな」

あの難攻不落のみちるがこれで落ちるとは思えないしな。

ゴールまであと僅か。
神社の前には4人の人影……ん？足りねぇな。

「お疲れ様〜」
「おう、サンキュ」

つかさからタオルを受け取り、汗を拭く。

「で、足りねぇ奴は？」

「かがみとやなぎ君みたい」

やっぱりもやしか。走ってる途中見かけなかったから、何処かの路地で動けなくなってる可能性がある。

「チッ、探しに行く」

「待て」

今来た道を戻ろうとした所であきに止められた。

「やなぎは強がりだから必ず帰って来るさ。俺達が行っても野暮ってもんだ」

珍しく真面目に物を言うあきに何も言えなくなる。

「……だな、ここはやなぎを信じて待つか」

「それにもしかしたら2人で別の運動を」

バキィッ！

バカの頭を壁に叩きつけ、俺達はかがみとやなぎの帰りを待った。

〜やなぎ視点〜

マズい事になった。

今、俺達は路地裏にいた。

別に俺がマズいのではない。

「ったたぁ……」

かがみが足を捻ったのだ。
助けを呼ぶにも、携帯はカバンの中。カバンは神社の前。
かがみの携帯も家に置いて来たようだ。

「平気か？」
「なんとか……」

かがみを置いて行く訳にもいかない。

「……仕方ないか」

俺は、１つの決断を下した。

「俺がかがみを運ぶ」
「えっ！？」

突然の申し出に、かがみは一瞬呆然とした。

「よっと」
「ちょっ、やなぎ！？」
「動くな……よっ！」

今の態勢は俗に言う「お姫さま抱っこ」である。

「足、痛むか？」
「ううん、大丈夫……って違う！」
「何が」
「だって、恥ずかしいし……」

俺だって恥ずかしいよ。けど、我慢だ。

「……重いでしょ？」

「全っ然」

人を持った事はないけど、かがみはそこまで重くないと思う。

「……ありがとう」

お互いの頬が赤いのは、夕日の所為って事で。

「おっ、帰って来た！」

神社の前では、皆が待ってくれていた。

「うおっ、お姫さま抱っこ！」

「携帯何処だ！写メ撮らせろ！」

お前等なぁ……。

俺はかがみをそっと下ろしてつかさに預ける。

「お姉ちゃんどうしたの！？」

「ちょっと捻っちゃって」

かがみが怪我をしたので、この日はこれで解散となった。

「やなぎ、今日は……あ、ありがと」
照れながらもちゃんとお礼を言うかがみがちょっと可愛いと思えた。
「今度から気を……」
あ……れ……？かが……み……
ドサッ
「やなぎ？やなぎっ！？」
俺はそこで意識を失った。
後から聞いた話だと、俺は無茶をして力を使い果たしたらしい。
気絶した後は、はやととあきに家まで運ばれたんだそうだ。
余談だが、目が覚めた時に額に「肉」と書いてあったので、次の日に犯人を叩きのめした。
「イテテ、筋肉痛が……」
本気で少しは運動をしようか考えるべきだな。
「おーす、やなぎ」
軽い挨拶と一緒にかがみが歩いて来た。

「よっ。足はもういいのか？」
「ええ。一晩冷やしたら少しはよくなったわ」
それでも、運動は控えるようだな。
今日ちゃんと病院に行くとか。
「で？やなぎの方は？」
「全身筋肉痛だ……」
白状すると、かがみはクスクスと笑った。
「怪我が完治したら、またダイエットするのか？」
「ううん、暫くはいいわ」
「？」
何で急にやめたか、俺には分からなかった。
『やなぎに重くないって言われたからなんだけどね』

第４話「悪魔の数値」（後書き）

どうも、銀です。
第４話御覧頂きありがとうございます。
今回は前半はやと、後半やなぎが主役になりました。

はやと「頑張ったもやし」
やなぎ「もやし言うな」

次回は、変な空間に行くようです。

第5話「ストレンジゾーン」

～はやと視点～

今日の天気は快晴だ。なんか良い事がありそうだな。

俺は今屋上にいる。が、別に授業をサボっている訳じゃない。
今は昼休み。何故か屋上で昼飯を食おうというこなたの提案に乗っただけだ。
……ま、その後サボらない保障はないが。

全員飯を食い終わった後、突然こなたが提案をして来た。

「皆さ、今日私のバイト先に来ない？」

こなたのバイト先……？
ってか、こいつを雇ってくれた場所があるのか。

「行く行くー！」

まずあきが話に乗った。

「面白そうー」
「私達はいいわよ」
「はい、是非」

女子組はＯＫ。

「……今日は暇だしな」

「うん、行かせて貰うよ」
やなぎとみちるも行くか。
「俺もいいぜ」
「はいはーい、7名様ごあんなーいっ！」
ご案内？喫茶店とかなのか？

この後、良い事がありそうなんて言った事を後悔する事になる。
こなたの指示に従い電車に乗って、やって来たのは

「アキバよ、私は帰って来たー！！」
「あき、うるせぇ！」

そう、秋葉原だ。
まぁこなたの事だから予想はしてたが……。

「この前行ったばっかなんだけどな」
「じゃあ今叫んだのはなんだ」

今度はかがみからツッコミが入る。慣れたなー、アイツも。

「んで、何処な訳？」
「えーっと、少し待ってろ」
「早くしろよ」

あきの持ってる地図を覗き込む。
うおっ！？何だこれ……本当に地図なのか？

「こなたが描いた地図だ」
「アイツ、絵は下手だから」
下手って、これは壊滅的だな。
立往生していると、突然どっかのオタクがつかさに絡んでいた。
「すいません、写真撮ってもいいですか？」
「えっ、えっと……」
つかさの返答を待たず、男は写真を撮り始めた。
「こっちも1枚」
って、いつの間にか増えてるし。
「じゃあ、浩之ちゃんって」
プスッ、ドサッ
「嫌がってんだろうが」
最初いた奴に刺したダーツは睡眠薬が塗ってある。暫く寝てろ。
俺はダーツをもう3本構えてまだいる奴等を睨んだ。
「散れ」
「は、はいぃぃぃぃ！」

俺にびびって奴等は一目散に逃げていった。

「大丈夫か？」

「うん、ありがとうはやと君」

つかさは何ともないようだ。よかった。

「男の嫉妬は、みっともないぜ？」

「は？」

「と、冗談抜きにああいうのはいるからな。つかさなんて某ゲームキャラそっくりだから、コスプレと間違えられたんだろ」

俺はあきにそのゲームキャラの画像を見せてもらった。

た、確かに似てる……。

「早いとこ行こうぜ」

地図を解読したあきに付いて、俺達はこなたのバイト先へ向かった。

「お帰りなさいませっ、ご主人さまっ！」

唖然。その一言に尽きる。

こなたのバイト先、そこは所謂「コスプレ喫茶」だったのだ。

「ただいまっ！」

素で返すあき。お前すごいな、ある意味で。

「えと、た、ただい」

「やらなくていいぞ、みちる」

「奴が特別すぎるんだ」

あんな特別、いらんがな。

「ささっ、座って座って」

出て来たこなたの服装は、ウチのとはまた違う制服。これもコスプレなのか？

「ハ〇ヒか」

「流石はあき君」

……もういいや。

しかしアレだ。空気が濃いというか……。

あまり慣れそうもないな。慣れたくもないが。

「アンタ達、飲み物何にする？」

突然こなたの態度が豹変した。

「早くしなさいよ。遅いと罰金よ罰金！」

なんかすごい腹立つんだが。

「それが客に対する態度なの！？」
「ここではそれが仕様なの」
ああ……そうですか。
「もう決まったわよね？」
「私、メロンソーダ」
「ただのメニューには興味ありません」
「へ？」
オイ、それでいいのか店員。
「俺コーラな！」
「では、私はミルクティーを」
「僕はアイスティーを」
俺はアイスコーヒーでいいや。
「アンタ達はどれがいいの？」
「ちょっと待ってよ！」
「団員にあるまじき遅さね」
「いつから団員だっ！」
勝手に団員にされた、かがみとやなぎが突っ込む。
「ここではそういう設定なの」
なんか面倒だな。

「団長に逆らうなんて１００年早いわよ」
「じゃあアイスコーヒーでいいわよっ！」
「はぁ……俺も同じ奴で」
「団長命令よ、待ってなさい」

疲れる店だな。
けど、こういうのが好きな奴もいるんだろう。

「ふざけてんじゃねぇぞ！」

ん？あっちで何やら騒ぎみたいだ。

「俺の服にジュース掛けやがって！弁償だな！」
「す、すいません……」

体躯のいい男が店員の娘に怒鳴っている。服にジュースを掛けられたらしい。

「あー、またあの人か」
「知ってるの？」
「ジュースを運ぶ店員をわざと転ばせて、服に掛けさせて高いクリーニング代を出させてるんだよ」

最悪だな。って事は今被害者はあっちの娘か。

「ちょっとやめさせてくる」
「ちょっ、こなた！」

かがみの制止も聞かず、男の方に向かうこなた。
「今、わざと転ばせましたよね？」
「あぁ？何だテメー？」
「迷惑ですから止めてください」
体格さがあるにも関わらず啖呵を切る。
「うるせぇんだよ！」
ヤバい！男が逆ギレしてこなたに殴り掛かった！
急いでダーツを構えるが、それより先に動いた奴がいた。

「やめろよ」
「あき、君……」

あきはこなたの目の前で、男の拳を完全に止めていた。
普段のふざけた様子からは想像も出来ない程の鋭い眼光で男を射抜く。

「表出ろ。ここじゃ迷惑だからな」
「っ！上等だ！」
あきが手を離すと男は外に出た。
「こなた、大丈夫か？」
「あ、うん」
「そっか。ちょっと待ってろよ」

いつもの調子で外に出るあき。
けどアイツが大丈夫か？男の方は強そうだったし、俺が助太刀した方が

「あきは平気だろ」

そう言うのはやなぎ。コイツ等腐れ縁だっけ。

「アイツは友達に手を出す奴には容赦ないからな。心配なら外を見ろ」

やなぎ以外は全員外を見た。
俺もみちるもあきがキレた所見た事ないからな。

「おら、来いよ」

男は指を鳴らしてあきを挑発している。一方のあきは……

「まぁ待て」

変なポーズを取り出した。
左前に伸ばした右腕を右横方向に、右腰に伸ばした左腕を左横方向に、それぞれ移動させる。そして

「変身！」

という声と共に左腰に右腕を移し、両腕を下に広げた。

その時、何故かキュインキュインと何かが回る音まで聞こえて来た。
「おおっ、あれはク〇ガの変身ポーズ！」
「マイティかー。妥当だよな」
「タイタンは俺の嫁！」
こなたや周りの奴等が騒ぎ出した。
いや、知らんよ。ってか、やってる場合か。
「うし、行くぜ！」
あきは何故か持っていた携帯をしまい、ボクシングみたいなファイティングポーズを取った。
どうでもいいが、どうやらさっきの音は携帯から出していたようだ。
「ふざけてんじゃねぇ！」
ごもっともだ。けど、あきの挑発は成功したみたいだな。
頭に血が上った男はあきに襲い掛かった。
あきは相手の体格差を活かし、懐に入り込むと腹に一発叩き込む。
「がはっ！」
男が悶えている所を、その辺に落ちていた木の棒で鳩尾をぶっ叩いた。
その時の構え方はまるで剣道みたいだった。
「ぎゃああっ！」

苦痛で悲鳴を上げる男を今度は足払いで転ばせる。

「お次はっ！」

「イデデデデッ！」

続いて足を４の字に固めた。あれは確か柔道の技だよな。

「やなぎ、あれは」

「あきは殆どの格闘技を経験した事がある」

驚きの事実だった。いつもアホな事をやっては突っ込まれるあきが……。

「ぐうっ、クソッ」

「まだまだ」

逃れようと必死な男に、あきは馬乗りになり殴り始めた。

「ま、待っ……ぶっ！」

「俺の友達に手を出そうとしておいて、これで終わる訳ねぇよな？」

本当にあそこにいるのは普段のあきなんだろうか？

「言っただろ、容赦ないって」

後ろから、落ち着いた様子のやなぎの声が聞こえた。

〜あき視点〜

「皆、お待たせーっ！」

数分後、俺は爽やかな笑顔で、酷く殴られたさっきの男と店に入った。

「この人、話してみたら案外いい人でさー、服にジュース掛けたの許してくれるって。なっ！」

「は、はいっ！」

「それと、今までの事は認めて反省してるそうだからそっちも許してやってくれな」

「スイマセンデシタ……」

謝る男。ちょっとやり過ぎたかな？まぁ一件落着って事で。

「ふぅー、何か喉乾いちゃった。こなた、お水ちょーだい！」

「……」

あれ？さっきからこなたがやけ静かだな。今度はどんなキャラなんだ？

「あき君のバカっ！」

「うおっ！？」

急に怒鳴られた。そ、そんなキャラいたっけなぁ……？

「心配、したんだよ？」

「……」

コスプレじゃない。本当に心配してくれたんだな。

「わ、わりぃ」

「許すっ！」

ドサッ！

全員思わずずっこけた。あっさり許すんかいっ！

「お水ね！今持ってくるから待っててね～！」

いつもの調子に戻ったこなたが店の奥に向かった。

「……ちょっと、フラグ立ったよ」

「ん？何か言ったか？」

「何でもないよ～！」

「あ、あの……」

さっき男に絡まれていた娘が話し掛けてきた。

ほほう、定石のメイド服、しかもミニか。

「さっきはありがとうございました！格好良かったです！」

「いやいや、気にする事はないよ。可愛い女の子を守るのは男、いや漢の勤めだからな！」

ああ、こういうのいいなぁ。

黄色い声に包まれる英雄……そしてそこから恋が

「わっととぉ！」

バシャァッ！

「……」

妄想していると、こなたに水をぶっ掛けられた。

「あっ、ごめーん。つい滑っちゃって（棒読み）」

あれっ？棒読みですよこなたさん？

「今拭くから動かないでねー」

ベシッ！ベシッ！

あ、あれ？拭くと言うより殴ってませんかこなたさん？

「痛っ！？痛いって！ねぇ！？」

～はやと視点～

数日後。学校であきに問い詰めた。

「お前、あんな強かったのな」

「んーや、弱いよ」

は？また何言ってんだコイツは。

「だって殆どの格闘技の経験があるってやなぎが言ってたよ」
「いや、まぁ確かに合ってるんだけどな」
「では、何故弱いと？」
「総合的にはそんなに強くないって事だよ」

総合的に？どういう事だ？
みちるやみゆき達も首を傾げる。

「俺は小学生の時に、違う格闘技をそれぞれ1年ずつやらされたんだ」

な、何ぃ！？

「だからどれに特化した訳でもなく、個人の強さはそこそこ強い程度。才雅や風樹なんかには絶対に勝てない」

なるほど、だから「総合的に弱い」ね。

「因みにカポエイラは中学の時な」
「聞いてねぇよ」
「でも、今やらされたって言ったよね」

みちるの言った通りだ。あきが自分から……やる訳ないよな。

「親父にやれって。その代わり達成したらＰＣ買ってくれるって約束したしな」

あきの使い方うめぇな。

「んな事よりもさ！これを見ろ！」
あきが天にかざしたカード。それは……？
「あ、ウチの常連カード」
こなたのバイト先の常連の証……らしい。
「あの店気に入った！可愛い知り合いもいるしな！」
そう言ってこなたに親指を立てるあき。
「グッジョブ！流石はあき君！」
こなたもあきに親指を立てた。
「でも割り引きはしないよ」
「えぇ～」

「！」
「どうしたの？はやと君」
「いや、何でもない」
今、気の所為か、こなたの頬が一瞬赤くなったように見えた。

第5話「ストレンジゾーン」（後書き）

どうも、銀です。
第5話御覧頂きありがとうございます！
今回はあきが主役でしたー。何故っ！？

あき「いいじゃん！」
はやと「よくねぇよ」

次回は内なる彼が目覚めるようです。

第6話「空虚」

～はやと視点～

梅雨。俺が一番嫌いな時期だ。
こう雨が続くと、屋上で昼寝が出来ない。
今日もまた雨。気分までどんよりしてしまう。

「だりぃ～」
「だらしないわねっ！」

机でだらけてると、かがみに叱られた。

「いつも寝てるんだから、こんな日位シャキっとしたら？」
「それは違うな、かがみ」
「何が？」
「こんな雨が続くからこそだらけるんだ！」
「力説すなっ！」

ちっ、通じないか。隣のつかさはコクコクッと首を縦に降っているのに。

「それ分かる～」
「だろ？」
「ああ、もうコイツ等は……」

だらしない2人に頭を抱えるかがみだった。
第6話、完。

「ちょっと、やなぎからも言ってやってよ」
むっ、最終兵器を持って来たか。
けど、屈する気はないな。

「だらける程元気が余ってるなら、俺とチェスでもしないか？」

「さー、元気だ。シャキっとするかー」
「ええっ！？はやと君！？」
「おおっ、効果抜群ねっ！」

やなぎとチェスだ？
冗談じゃねぇ。一瞬で見せ物にされるだけだ。

「つかさ、ここは従っとけ」
「う、うん」
「じゃあかがみ、やるか？」
「わ、私も別にいいわよ…」

かがみもやなぎの恐ろしさを知ってたか。

「かがみじゃ、到底やなぎには勝てないな」

背後から、あきがかがみを煽った。

「じゃあアンタはどーなのよ」
「残念だったな！」

なっ、まさか！？

「チェスのルールすら知らない」

ズガッシャァン！

余計にダメな方かよっ！

「体力勝負じゃもやし君に勝てるのに」

「悪かったなっ！もやしでっ！」

体力勝負でやなぎに負ける奴っていんのか？

「かがみに勝てるのは……」

「な、何よ？」

「体しぼ」

「一度鉄拳制裁を下した方がいいようだな……！」

どす黒いオーラを纏ってあきににじり寄るかがみ。

あき、墓参りには行ってやるぞ。２回くらい。

「ヤバッ、逃げろ！」

「待てぇぇ！！」

教室内での追い掛けっこが始まった。
元気有り余ってるよなー、アイツ等。
〜みちる視点〜

今日、僕は宝物を持って来た。
ある1枚の写真何だけど、とても大切な物。

「みゆき！」

それを見せたい人を見つけて、声を掛ける。

「何ですか？みちるさん」
「ほら、覚えてる？この写真」

写真立ての中を見て、みゆきも思い出したみたいだ。

「わぁ、懐かしいですね」

写真の中は小さい頃の僕、みゆき、みなみ、子犬のチェリーがいた。
この後引っ越してしまい、僕が持っている3人で写っている写真は
この1枚だけ。
それだけにとても大切な物なんだ。

普段は部屋に飾ってあるんだけど、今日は特別に持って来た。

「みゆきはこの写真持ってたっけ？」
「はい、大切に飾ってありますよ」

みゆきの言葉を聞いて、また嬉しくなる。

「あの、1つお願いがあります」
「何だい？」
「みちるさんのフルートを聞かせて頂きたいのです」
僕のフルート、みなみのピアノのセッションがみゆきは好きだったっけ。
「もちろん、みゆきのためだけの演奏会を開いてもいいよ」
「っ！」
突然みゆきの顔が赤くなった。どうしたのかな？
「あ、久々にみなみとセッションもしたいなぁ」
「え……そ、そうですね」
みゆきのおばさんや、みなみのおばさんも喜んでくれるかな？
「どいたどいたぁーっ！」
「待てぇーっ！」
突然、あきとかがみがこちらに走って来た。
「みゆき、危ない！」
「きゃっ！」
ドンッ！

あきがぶつかりそうになったので、みゆきを庇った。

パリーーンッ！

「みちるさん、ありがとうござ……みちるさん？」
「ヤバッ！」

あきがぶつかった拍子に、写真を落としてしまい……。

「ちょっと！謝りなさいよ！」
「わ、悪いみちる！」

写真立てのひび割れたガラス。僕の思い出が……。

あれ？なん、で……？
いし、き……が……。
～はやと視点～

教室内で起こった事件に、周りはシーンと静かになる。
あきはひたすら謝ってるし、みちるは反応せずに動かない。
床には、割れたガラスと写真立て。中の写真はそんなに大事な物だったのか？
みちるは普段怒らないタイプだったので、不安に駆られる。

「なっ、写真立てなら弁償するから！」

あきはみちるの肩を持って謝り続ける。こんな光景も珍しい。

「……気安く触ってんじゃねぇ！」

バキィッ！

！？

恐らく教室内の誰もが、一瞬何が起こったか理解出来なかっただろう。

みちるがあきをぶん殴った。

「あーあ、怒らせやがって。お陰で俺様が出られたんだけどな」

口調まで変わっている。ってか、明らかにみちるじゃないような喋り方だ。

「み、みちる？」

「みちる、さん？」

殴られたあきも、隣にいたみゆきも呆然としている。

「はっ、俺様は「みちる」じゃねぇ！「うつろ」だ！」

うつろ？みちるじゃない……？

何言ってやがんだ？

「二重人格、か」

やなぎが落ち着いて物を言った。

「二重人格って、アニメやゲームのキャラによくあるあの？」

こなたが食い付く。今、アニメやゲームの話してないから。

「ご名答。俺様はみちるが主に激しく怒った時に出て来れる」

みちる……いや、うつろが自ら語り出した。

「今日はそこのバカが写真立てを割ったから怒った訳だ」

「うっ……」

うつろに指差され、バツの悪そうな顔をするあき。

「主に、というと？」

「知るか。それしか知らねぇよ」

やなぎの質問をうつろは適当に流した。

コイツ、本当にみちると違うな。

「さてと、とりあえずここの女は全て俺様の物になれ」

「はぁぁぁ！？」

奴はいきなりトンデモ発言を放ちやがった。

「お前等の物は俺様の物、俺様の物は俺様の物だ」

何処のガキ大将だ。

「おいお前、何かジュースを買って来い」

あきに命令するうつろ。

次から次に自分勝手な事を言いやがって。

「みちるを返せよ」

あきはとうとう、うつろにケンカを売った。

「あ？」

バキィッ！

「なっ！？」

対するうつろは、何も言わずにあきを殴った。

「貴様ぁ、誰に口聞いてんだよっ！」

ガスッ！

倒れこむあきを踏み付けるうつろ。

まるで、いや暴君そのものだ。
「みちるさん、止めてください！」
みゆきが止めようとするが、うつろは聞かない。
「みゆきぃ、お前はもっと賢い女だと思ってたけどなぁ？」
「……？」
「俺様は、うつろだ！」
ドンッ！
「きゃっ！」
あの野郎、みゆきを突き飛ばしやがった！
「アイツは全てを持ち、欲しがらなかった「満ち足りた存在」だった！けど俺様は全てが欲しい！金も、女も、力も！「虚ろなる存在」、それが俺様だ！」
うつろが何か演説しているみたいだが、俺はもうそんなもの聞く気にはなれなかった。
「へっ、使えねぇ。んじゃあお前、ジュース買って来い」
うつろは、今度は俺に指を差し命令する。
「もし翼があったら、みちるを簡単に取り戻せるんだろうか？」
「はぁ？」
俺は右のホルダーからダーツを3本出し、うつろに投げた。

針先は麻酔薬だ、暫く動くな！

「うおっ！？」

うつろはしゃがんでダーツを避けた。チッ！

「てめぇぇぇ！！」

激昂するうつろ。ヤバいな。

「そこまでだ」

「！！」

復活したあきがうつろの体を捕まえた。

「離しやがれ！」

「やれ、はやと！」

「よし、動くなよ！」

俺は動きの止まったうつろにダーツを投げた。

「っざけんなぁぁ！」

うつろはあきの足を思いっきり踏み付けた。

「ッ！」

痛みに顔を歪ませ、うつろを捕える力が弱まってしまった。
その隙にダーツから避けるうつろ。

「死んどけぇぇぇ！」

バキィッ！ドシャァッ！

俺に向かって走り、殴り掛かった。
俺は殴り飛ばされ、教室の壁に叩きつけられる。
いってぇな……クソッ！

「はやと君！」
「平気だ」

つかさが心配して駆け寄ってくれた。
大丈夫だが、相手するにはかもな。

「次ィ！」

うつろは次に、あきを標的に捉えた。

「来い、目ぇ覚まさせてやる！」

あきも本気でやるようだな。
先に動いたのはうつろ。走り出し、あきとの距離を縮める。
一方あきはボクシングの姿勢を取った。

うつろは気にせずあきに拳を突き出す。
しかし、見切られて逆にカウンターを放たれる。
「はっ！」
鼻で笑い飛ばし、うつろは空いている手でカウンターを止めてしまった。
「で？」
「っ！？」
一瞬動きが止まったかに思えたが、すぐさま頭突きで攻撃した。
不意打ちに近かったからか、あきのダメージがデカい。
「くたばれ」
ドゴォッ！
そのまま、うつろはあきを蹴り飛ばした。
聞こえる女子からの悲鳴、倒れるあき。
「立て、立つんだジョー！」
空気読め、こなた。
「くそっ、燃え尽きたぜ……真っ白にな……」

あきも乗らんでいい。

「もう終わりかぁ？」

唇を舐め回し、あきに近付くうつろ。

「お前はただじゃ済まさねぇ。骨2、3本折って病院送りに」

ピタリ、とうつろの動きが止まる。

目線の先には、座り込んだままのみゆきと割れた写真立て。

写真立て。

写真。

「ぐおっ！？」

突然、うつろが頭を抱え出した。

「チッ、もう終わりか……！」

終わり？もしかして、みちるが返って来るのか？

「だがな……俺様はまた……」

それだけ言って、うつろは完全に動かなくなった。

「……あきっ！」

「は、はい！？」
「写真立て割れちゃったじゃないか！僕も流石に怒るよ！」
うつろが現れた時と同じように辺りが静かになる。
「みちる、さん？」
「ん？どうしたのみゆき？座り込んで」
どうやら、みちるに戻ったらしい。
「って、あき！その怪我は！？それに……」
教室内はあきとうつろが戦った所為で荒れていた。
それより、みちるは何も覚えていないのか？
「一体何が起きたの？」
うつろが出ていた時の記憶は、みちるにはないらしい。
それでも、教室内の奴等の視線がみちるに集中する。
「えっ……僕がやったの？」
マズい！みちるは優しい奴だから自分がやったと分かったら激しい自己嫌悪に陥るぞ！
「変な男が入り込んだんだ」

そう言ったのは、やなぎ。
敢えてうつろの事を教えないのか。
いや、その方がいいかもしれない。

「あきとはやとが追い払ったんだ。みちるは気絶してたから覚えてないんだろう」
「そーそー！案外強くてさー」
「大した奴だったな」

俺達もやなぎの話に合わせる。
すると、みちるは納得した。

「そうだったのか……。あき、大丈夫？」

あきに手を差し伸べるみちる。

「平気だ。んな事より、写真立て悪かったな」
「ううん。写真は無事みたいだし、それに」

みちるはあきを立たせると、みゆきの方を向いた。

「大切な思い出が消える訳じゃないよ」

この日、２－Ｅに暗黙のルールが出来た。
それは、「みちるを怒らせない事」。
〜みちる視点〜

あきとはやとを保健室に送った後、教室に戻ると綺麗に片付いていた。

「みちる君、はやと君達どうだった？」
「大丈夫みたい。はやとは「授業がサボれる」って喜んでたけど」
はやと君らしいね、と笑うつかさ。

「みちるさん」
「みゆき、大丈夫？突き飛ばされたって」
「私は大丈夫です。それより、これを」
みゆきが持っていた物、それはガラスの割れた写真立て。
中の写真は無事みたい。よかった。

「ありがとう。新しい写真立てを買わなきゃ」
「あの、その時は私もご一緒しても……？」
みゆきからの嬉しい誘い。もちろん断る訳もない。

「みゆきが選んでくれるの？」
「えっ？ええ、よろしければ」
「嬉しいなぁ～！今度、一緒に行こうね！」
「はい！」

思い出が消える訳じゃない。
もし消えても、君との新しい思い出を作ればいい。

第6話「空虚」（後書き）

どうも、銀です。
第6話御覧頂きありがとうございます！
今回はみちる、というよりうつろが主役でした！

はやと「何でこんな厄介な奴作ったんだ？」

みちるに聞いてくれ。
次回は、体育の様子です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8947x/

すた☆だす

2011年10月28日12時20分発行